



1636年～1869年(約230年)

伊予西條藩を知る ⑮

(第一次西條藩)一柳家、(第二次西條藩)松平家
第9代藩主 松平頼学 (在任期間 1832～1862年)



三浦安(みうらやすし) 第十三代東京府知事

- ・幼名:光太郎、通称:五助又は休太郎
- ・生年月日:1829年(文政12年)8月18日、
- ・没年月日:1910年(明治43年)12月11日(81歳没)
- ・知事在任期間:1893年(明治26)10月26日～1896年3月14日 (坂本龍馬)



三浦安は、文政12年(1829)8月18日、紀州藩徳川家支藩の伊予西條藩家臣・小川武貴の長男として生まれ、幼名を光太郎又は五助と名乗る。

千種善左衛門の奥方・安さんが、風伯神社祭礼の日に参詣の帰路、魚屋町で大勢の子供らが遊んでいたその中に色の白い身体の大きい七～八歳の少年が、大勢の友人を指揮するその采配ぶりが奥方の目に留まり、少年の案内で母親を訪ね事情を聴くと、小川武貴のお屋敷に奉公していた女中が産み育てていた光太郎(通称:五助)であった。

その後、奥方は夫・善左衛門と協議してその母親を説き伏せ、五助(8歳)をわが家に引き取った。千種夫婦は、優れた資質と好奇心旺盛な五助の将来に望みをかけ江戸に遊学させようと西條藩儒山野・安井などに学ばせ、のちに西條藩から派遣されて嘉永3年(1850)から安政元年(1854)までの5年間、江戸の昌平坂学問所で漢学を学び、天下の士と交わった。

その後、帰郷した五助は千種夫婦が斡旋して安政2年(1855)に三浦家の養子となり継ぎ、千種善左衛門の推薦を得て翌3年(1856)から文久2年(1862)の7年間、「三浦休太郎」と名乗り西條藩の郡奉行の要職に就き民政の刷新に手腕を振った。

※千種善左衛門(ちぐさぜんざえもん)は、西條藩筆頭御留守居役と奉行を兼任する。

※千種安(千種善左衛門の妻で、実家は家中赤星家)、千種家と小川家(四軒町)とは、筋向いであった。

※「四軒町」の町名は、東側の四重臣の武家屋敷「神保・小川・宇治村・三宅」が4軒あったことに由来する。

※五助は、実は小川八兵衛が魚屋町から来ていた女中に産ました子供である。

三浦休太郎は、西條藩9代藩主松平頼学の六男・松平頼久が、本家紀州藩の家督を継ぐと随行して紀州藩に移り紀州藩附家老水野忠央の懐刀として14代目將軍継嗣問題で一橋家を排除して、南紀派の勝利に貢献し紀州藩13代藩主・徳川慶福(のちの14代將軍)擁立に成功し能力を認められ、元治元年(1864)主家である紀州藩に取り立てられ転籍した。

慶応3年(1867)当時、「紀州藩京都朝廷詰公用人」という役にあった三浦休太郎(安)は、公武合体派の中川宮の信頼を得て佐幕派として京都の政界で幅を利かせるようになり、6月の大政奉還の際には紀州藩家老名代として二条城に登場しています。

※松平頼学(よりさと)は、西條藩9代藩主で西條藩6代藩主となった松平頼謙の曾孫である。

※松平頼久(よりひさ)は、紀州藩(最後の)第14代藩主・徳川茂承(もちつぐ)で、西條藩主松平頼学の6男

で、西條藩江戸上屋敷で誕生する。西条 10 代藩主松平頼英は弟。

※徳川慶福(よしとみ)は、紀州藩 13 代藩主でのちの江戸幕府第 14 代将軍徳川家茂となる。

「近江屋事件」、慶応 3 年(1867)11 月 15 日、京都四条河原町の旅館「近江屋」において土佐海援隊の中心人物「坂本龍馬」と陸援隊隊長「中岡慎太郎」が何者かに暗殺された。坂本龍馬の死を知った海援隊士たちが最初に疑ったのが、「いろは丸」の賠償問題で恨みがあったとされる三浦休太郎(安)が容疑者(黒幕)として狙われることとなった。

「いろは丸事件」とは、龍馬が暗殺される約半年前の慶応3年(1867)4月23日深夜に起きた龍馬率いる海援隊の汽船いろは丸と紀州藩の軍艦明光丸が、瀬戸内海讃岐沖(鞆の浦)で衝突する事件である。この時、龍馬は御三家紀州藩との談判で一步も引かず、万国公法(国際法)を盾に金塊や武器弾薬などの積荷分、**8万3,526両198文**の損害賠償を要求し(約25億円~42億円に相当)、その後藤象二郎の協力も得て龍馬は、この日本最初の海難審判に全面勝利し、その後、紀州藩からの減額交渉があり、紀州藩が海援隊に賠償金7万両を支払うことで決着を見るのですが、その7万両が土佐商會に支払われたのが11月7日のことでした。

※いろは丸・伊呂波丸|伊予大洲藩から借りていた英国製蒸気船。平成に入ってから海底のいろは丸の潜水調査では、龍馬の主張した武器類は見つかりませんでした。

※江戸時代後期の1両は、現在の価値に換算すると3万円~5万円です。

※土佐商會・土佐藩が経営する長崎の商社で、この当時、海援隊を管理していた。

暗殺事件にからみ紀州藩京都朝廷詰め公用人「三浦休太郎(安)」が、新選組を教唆したとの疑いから龍馬が暗殺された11月15日から約3週間後の慶応3年12月7日夜、陸奥陽之助ら海援隊・陸援隊士総勢 16 名が、三浦休太郎(安)、新選組隊士らが京都油小路通り花屋町の旅館「天満屋」2 階にて酒宴を行っていたところを襲撃した。この乱闘で三浦休太郎(安)は頬を3寸程斬られたのみで、襲撃されるや屋根伝いに逃げのびた。この戦闘で1階を守っていた西條藩槍術指南役の佐波兼明(さなみかねあき|33歳)・新名喜三郎と三浦の若党藤左衛門は楼下に在りしが、槍傷を受け西條藩士3名殺され、新選組からも1名死者が出た。これが世に言う「天満屋事件」である。

戊辰戦争が勃発すると三浦休太郎(安)は、一時捕縛されたが間もなく釈放されて明治政府に出仕した。明治維新後は諱である「安」を名乗り、大蔵省官吏、元老院議員、貴族院議員を務め、1890年10月20日、錦鶏間祇候となる。**第13代東京府知事**となるが淀橋浄水場をめぐる疑獄事件から不信任を決議され、知事を解任された。知事解任後は、宮中顧問官などを歴任した。また香瀾という雅号もあった。

明治 43 年(1910)12月11日に脳溢血により、青山の自宅にて 81 歳で死去した。

※参考文献:

「三浦安について(西越栄次郎)」「西条市誌(西条市)」「西条人物列伝(西條郷土史研究会)」

「南紀徳川史」「えひめの記憶(愛媛県生涯学習センター)」他